

図書館だより

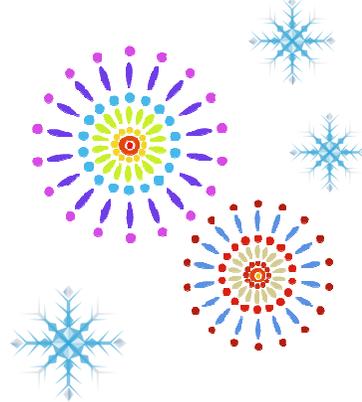


No. 10

平成 27 年 2 月 20 日発行

去年は100年に一度と言われる大雪に見舞われた関東地方でしたが、今年は降ってもそれほどの雪が積もることなく、ホツとしながら2月を過ごしています。ただ、少し積もっただけでも路面はかなり滑りやすくなっています。雪道を歩く際は十分に気をつけましょう。

雪のイベントといえば、2月上旬に開催される北海道のさっぽろ雪まつりが有名ですが、新潟県でも気になるイベントを見つけました。それは越後妻有地域(十日町市・津南町)で開催される雪花火です。一面真っ白な雪景色の中、冬の夜空に花火が輝きます。また2万個以上のLEDライトによる高橋匡太の“光の花畑”も見どころとなっているようです。想像するだけでも思わずうっとりしてしまう絶景が浮かびますね。このイベントは3年に1度、この地で開催されている『大地の芸術祭』の一部なのですが、この大地の芸術祭も見どころいっぱいのお祭りです。新潟を訪れる機会があれば、ぜひこの大地の芸術祭もチェックしてみてください。



雪景色を見たくになったら*

706-キ 『死ぬまでに見たい！雪と氷の絶景』 エクスナレッジ

雪と氷が織り成す世界中の幻想的な景色が集められた本。「こんな景色が本当に存在するの？」と疑ってしまうような絶景ばかりです。ヨーロッパ、アジア、北米とどの地域も、そこでしか見ることのできない、とっておきの景色を持っていますが、日本の冬景色も世界に負けていません。日本に住んでいるのに知らずにいた素晴らしい景色に出会えます。寒い季節は苦手という人も寒さを忘れて国内外へ旅に出かけたくなってしまうかも！！行き方と旅費もばっちり載っているので、お気に入りの場所を見つけた人はいつかのための計画を立ててみてはいかがでしょうか。

大地の芸術祭の全貌*

290-エ 『美術は地域をひらく』 北川 フラム || 著 現代企画室

世界最大級の国際芸術祭と呼ばれる『大地の芸術祭』が、どんな思いのもとで生まれたのか、どんな作品が創り出されてきたのか、アートによる地域づくりとは何なのか、そうした全てを知ることができます。今までその名や場所を知らなかった人もこの本を読むと、「こんなところがあったのか！」と、驚くと思います。田んぼが、里山が、学校が、民家が芸術作品として、集落に点在している様子というのは、不思議な感じもしますが、その規模の大きさや作品が放つパワーが写真からも伝わってきて、眺めていると、どんどん惹き込まれていきます。

贈る言葉に代えて

3年生の登校日も残り僅かとなりました。少し早いですが、みなさん卒業おめでとうございます。今、それぞれの心の中にはどんな思いが込み上げてきているのでしょうか。希望や期待、不安や寂しさ、たくさんの思いを抱えながら旅立つみなさんのこれからの活躍を願っています。ここでは、3年生へ贈る言葉に代えて、みなさんを応援する3冊の本を紹介します。

379-ト 『学び続ける理由』 戸田 智弘 || 著 ディスカバー・トゥエンティワン

私は常に完成品ではなく未完成品であり、途上にある存在である。

学生時代を終えても、学ぶことは終わりません。「え、まだ学ばなくちゃいけないの」と思う人がいたとしても、そういう人も意識せずに何かしらを学びながら日々を送っていくはず。それは自らの意志で選んだ学びであり、その中から学生時代には感じなかった学ぶことのおもしろさに気がつくかもしれません。そして、その学びによって、人生は磨かれていきます。これからもよりよく学んでいけるよう、“学び続け方”を数々の名言と共に考えてみましょう。学ぶ意欲を掻き立てられる名言がたくさん載っています。

B917-イ 『ボールのようなことば。』 糸井 重里 || 著 東京糸井重里事務所

ここまで長いことつきあってきた「じぶん」は、誰にも渡せないし、誰のものでもないよ。

悲しかった日、楽しかった日、何でもなかった日、どんな日に読んでもきつと言葉のどれかが自分に当てはまってくる本。一見、さりげない言葉のようなのに、ずっしりと重みがあって、読んで終わりにはできない力があります。その一言に救われたり、何か気がついてハツとしたり、誰かを思い浮かべてドキドキしたり、本からポンと投げられた言葉によって心が色々な反応を示すのを感じます。

たくさんの壁にぶつかって、たくさん悩む、そういう年代になるみなさんのお守りみたいな存在になるはず。

933-ハ 『小公女』 パーネット || 著 金の星社

もし私が王女さまなら、位を追われても、かわいそうな人がいれば、ものを分けてあげるはずよ

アニメでも「小公女セーラ」のタイトルで見たことのある人も多いでしょう。先日「パーネットの描き出す子どもは、決して良い子だけの子どもではない」という文章を見、だからこの話は魅力的だったのかと再確認しました。苦境にある時心が折れそうな時にも、セーラは心の中では本物の王女さまになっているつもりでちゃんと頭をあげ堂々としています。そこには自分はどんな存在でありたいのか、明確な意思を感じます。皆さんには、ありがたい自分のビジョンがありますか。これから先、苦しい時や辛い時にはぜひこの本を読み返して、自分らしさを失わないよう頑張ってみてください。

🎀 未来を切り開くためのキーワード 🎀

『未来を切り開くためのキーワード』第9回目のキーワードは“表現する”です。

自分の気持ちや考えを伝える。その手段は、言葉だったり、文章だったり、表情だったり、様々です。しかし、どの手段をとっても伝えるというのは難しく、うまくいかないなど感じる事が多くあります。どう表現したら、うまく伝えることができるだろうと悩んだ経験はきっと誰にでもあるはず。

表現したことがしっかりと伝われば、相手との繋がりもより確かなものとなります。また、表現するコツを掴み、その場に応じた手段で自分を表現できるようになることは、生涯を通じて役に立つ力です。本で学び、実践を繰り返して、力を身につけ、活かしていきましょう。



プレゼンで伝える

336-イ 『バスガイド流プレゼン術』 伊藤誠一郎 || 著 阪急コミュニケーションズ

旅行で観光バスに乗った際、バスガイドさんの話術にはまった経験はないでしょうか。思い返してみると、バスガイドさんが旅の始まりから終わりまで繰り返し広げてくれるトークは、しっかりと構成がされていて、ユーモアもあり、飽きのこない楽しさでずっと聞いていられます。この技術こそが、プレゼンテーションに繋がるのです。この最高のプレゼンターとも言えるバスガイドさんから、「聴き手にわかりやすく伝えるプレゼンテーション」を学んでいきます。プレゼンテーションを旅と捉えるという発想で考えると、プレゼンテーションに必要なのが何かというのがとても理解しやすいです。内容をまとめるのも大変な作業ですが、さらに苦労するであろうプレゼンでの話し方についてもそのコツを要点をまとめて教えてくれています。

声で表す

809-ヤ 『ハッピーボイストレーニング』 山口 容子 || 著 ソフトバンククリエイティブ

きちんと話しているつもりなのに聞き返されてしまう、大きな声がなかなか出せない、人前で話すのが苦手など、声にまつわる悩みを抱えている人は多いのではないのでしょうか。その悩みを解消するのに役立つのがこの本です。アナウンサーとしての経験を持つ著者が自らの体験を元に、発声の練習、表情の作り方、声を出すための姿勢や体づくりなどを誰でも気軽に、そして楽しく、取り組める方法で紹介しています。合間に載っているQ&Aでは、自分の話し方で悩んでいる人や人前で話すのが上手い人から寄せられた相談に対する回答が載っています。自分の悩みに重なるところがあるなど感じる人はそちらのアドバイスも参考にしてみてください。話すことに自信をつけましょう。

文章に強くなる

816-イ 『伝わる文章の書き方教室』 飯間 浩明 || 著 筑摩書房

文章を書くのに必要な要素となる語彙力、表現力、論理力をゲームのように楽しみながら鍛えるトレーニング。そう聞くと、ちょっと興味をそそられませんか。その気になるトレーニングは書き換えトレーニングというもので、実際に読みながら行ってみると、かなり頭を使いますが、確かにクイズを解くような感覚で楽しむことができます。解けなかったところも「ここはどうしたらよかったんだろう」と気になり、自然と解説を読むのにも力が入ります。少し試しただけでも、文章を書く時、この言葉を置き換えると、他にはどんな言葉が使えるだろうとか、この言い回しは回りくどくなっていないかとか、色々なことを気にかける意識が身につきます。

📖 図書館司書の「今月はこの本を読みました」 📖

加藤千恵さんの『こぼれ落ちて季節は』(913.6-カ 講談社)

を読みました。同じサークルの男子を好きになってしまった女子二人、バイトの後輩に片思い中の男子とその彼に密かに想いを抱く元同級生、見た目も性格も似ていない姉妹など、対になった二人のそれぞれの視点で短編が書かれています。片方がこう思っていた時、もう片方はこう感じていたんだと二人の間で交わされていた心の描写がおもしろかったです。せつなかつたり、複雑だつたり、楽しいって言葉じゃ収まらない色々を抱えている主人公たちに感情移入しながら、あっという間に読んでしまいました。



そして、短編同士も繋がっていて、もうちょっと先まで知りたかったなという部分が他の人のストーリーの中に出てきたりしていて、「あの後、こうなったんだな」とわかるのもおもしろかったです。私は、意外なモノがキーワードになっていることを発見したのですが、みなさんは気がつくでしょうか。 【今井】

『ある英国人が愛した素顔のニッポン』(934-7 G. B.) マルコム・デイビッド・ワトソン || 著

を読みました。マルコムと日本女性・環が結婚したのは2012年4月30日。その20日前に彼はALSと診断され、余命2~5年と言われてしまいます。環の仕事の都合から、2013年1月に日本に移住し、亡くなるまでの11か月間を日本で過ごしました。難病を抱えた彼が英国の家族や友人にメールで語った東京での暮らしや話題は、イギリスとの医療や福祉の違いから、政治、経済、日本人の奇妙に思える習慣や3・11について、とても幅広い分野にわたっています。自宅から見える小石川植物園の景色を愛し、周囲の国と上手く付き合えばいいのにとつぶやき、日本人の働きぶりに驚き、iPS細胞を使った最新の研究成果に期待を寄せる彼から見えた日本は、興味深い文化に満ちていたようです。何よりも日本人に対する信頼が感じられました。日本に生まれ育った私たちが何気なく見過ごしてしまう日本の良さや問題点を気づかせてくれます。 【鈴木】